

# 文化財レスキュー事業への みなとびの取り組み

森 行人



長野県栄村での地域史料保全有志の会による文化財保全活動には、新潟資料ネットをはじめ多くのボランティアが参加した。2011年8月

二〇一一年三月十一日の東日本大震災は、被災地域の歴史資料にも大きな被害を与えました。被災した資料を少しでも救い出し、保全して後世に伝える取り組みが進められています。

## 被災資料の保全活動

東日本大震災の後、甚大な被害の中で関係施設や資料の被災状況を調べることは困難でしたが、様々な団体や機関、個人が被災状況の調査や情報の集約を行い、インターネットなどで情報を発信しました。特に、一九九五年の阪神・淡路大震災以降、被災資料の保全を目的として各地で結成された資料ネットワークが大きな役割を果たしました。被災地での資料の保全活動も始められ、二〇一一年三月三十一日には文化庁が東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）を発表し、全国の機関・団体に支援を呼びかけました。

## 支援物資の提供

四月に入ると、作業の手順や必要な物資など、保全活動の具体的な状況がネット上で発信されるようになりました。津波や地震を原因とする水害により水損した資料は、劣化の進行を抑制するために、水害を受けた場所から搬出し、作業が可能な場所へ輸送し、洗浄・乾燥作業をして、一時保管します。水損が著しい資料には、真空凍結乾燥処置が必要です。

こうした情報発信を通じて、保全活動に必要な物資や機材、あるいは保管場所などを具体的に知ることができました。そこで、文書箱や段ボール箱、巻ダンボールなど、当館が資料の梱包・輸送に使用している物資を提供する支援を始めました。これは現場の緊急の求めに応じるとともに、規格の揃った資料を提供することが現場への支援になると判断したためです。指定管理者として当館を運営している私たちは、新潟市と協議を行った上で物資提

供の情報を発信しました。支援情報の発信に際しては、支援を要請する団体との連絡を円滑に進めることができるよう、新潟歴史資料救済ネットワーク（以下、新潟資料ネット）に協力を依頼しました。これにより、新潟資料ネット経由で山形文化遺産防災ネットワーク（山形ネット）から支援要請があり、新潟県立歴史博物館（以下、県博）と協力して物資の提供を行いました。この後、茨城文化財・歴史資料救済保全ネットワーク準備会（茨城史料ネット）、岩手県立博物館からも支援の要請があり、県博及び新潟資料ネットと協力し、新潟市文化財センターとも連携して支援を実施しました。

## 支援スタッフの派遣

文化財レスキュー事業の発表後、中核となる救援委員会が発足し、構成団体の日本博物館協会（以下、日博協）は加盟館を対象に派遣可能な人員の調査を行いました。当館も参加を表明し、六月に入ると日博協経由で文化財レス

## 今後の支援へ

文化財レスキュー事業は、緊急の救出・保全活動を要する段階を終えると、避難した資料の帰還と地域での活用を目指す管理体制づくりへと移ります。このような資料を活用可能な状態へと整理する作業には、長く継続的な取り組みが必要となります。たとえば、二〇〇四年の中越地震で被災した旧山古志村の文書資料は、長岡市中央図書館文書資料室と山古志支所、新潟資料ネットにより二〇一〇年度に現地へ返還され、現在も地元の方やボランティアを交えて活用に向けた整理作業が続けられています。



東日本大震災で被害を受けた文化財の保全活動。被災資料を移動した後の収蔵施設。宮城県石巻市、2011年6月。



文化財保全活動で使う道具。活動展示2011「伝える」にて展示。

こうした災害時の対応には広域的な支援が欠かせないため、当館もその体制づくりに取り組んでいます。当館は指定管理者制度で運営されているので、まず市と結ぶ協定において、災害時の広域的な連携活動を盛り込むことが必要と考えています。

## 平時の取り組みへ

新潟県の歴史資料の保存・活用に取り組んでこられた山本幸俊さんは、阪神・淡路大震災の後、被災資料の救援活動に関わる動向を受けて、歴史資料は無媒介に存在するのではなく、地域の人々・地域の行政・地域社会の生活や環境・文化の中に存在していて、地

域社会「【市民】の中で文化財をどう保存し、具体的に生かすかが課題だと指摘しています。地域にある歴史資料を保存し、活用するという活動を、地域住民と具体的、実際に共有することの大切さを述べています（「災害と史料保存」について考える―第八十一回全国図書館大会及び第二十一回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会に参加して―『新潟史学』第三十六号・一九九六年五月）。

このように、歴史資料の保全活動への支援の継続、あるいは今後発生する災害への備えのために、地域社会の中で資料の保存と活用が身近なものとなるような、日頃の活動が重要になります。

博物館の活動の中で、企画展や講演会は、資料を収集して保存し、整理・調査・研究する活動の成果を表すもので、最も見えやすい身近な活動といえます。それに対して、成果を出す準備段階の活動は、見えにくい裏側の作業といえます。しかし、歴史資料の保存・活用において、資料を収集し、整理する作業は、資料を選択し、その量的・質的な枠を設けるといふ意味もあわせもつ重要なプロセスです。こうした資料化のプロセスを具体的な内容とともに発信し、地域住民の参加を得て実践する試みとして、当館ではこの一〜二

月に活動展示二〇一一「伝える」という展示会を開催しました。この展示会は、展示と連動したイベントを多数開催する、参加型の展示会です。展示とイベントを通じて、歴史資料を保存する考え方、その具体的な方法と問題、資料の活用に必要な準備作業、そして資料から歴史情報を取り出す作業を一つ一つ提示し、実践を通じてそのプロセスを紹介しました。また、展示の中では、当館が市民と協力し、地域の文化財「歴史的建造物の活用・保存を活性化しよう」と試みた取り組みも紹介しました。

当館は、文書や民具、古い写真や美術作品など約十萬点の資料を収蔵しています。これらの多くは地域の人々が使い、伝えてきた家財で、博物館で保存・活用してほしいとの願いにより寄贈されたものです。当館は、これらを地域の歴史像を伝える資料として体系的に収集・保存し、その歴史像が自分や家族、地域の現在を知り、将来へつながる資源となることを目指しています。

日頃の歴史を伝える活動と、災害時の歴史資料を保全する活動との双方を視野においた取り組みを続けたいと考えています。

（もり ゆきひと 学芸員）